

ワシントン
風の便り

江藤 淳

ワシントン風の便り



江藤 淳

講談社

著者略歴

1933年東京生まれ。慶応義塾大学英文科卒業。文芸評論家。
東京工業大学教授。

著書 『小林秀雄』(新潮社文学賞)『漱石とその時代Ⅰ・Ⅱ』
(菊池寛賞・野間文芸賞)『一族再会』『海舟余波』『決定版
夏目漱石』『こもんせんす』(正・続・続々・再び・再々・
新)『漱石とアーサー王傳説』『海は甦えるⅠ・Ⅱ』『もう一
つの戦後史』『仔犬のいる部屋』『忘れたことと忘れさせら
れたこと』『一九四六年憲法——その拘束』『江藤淳著作
集』(全6巻)『続江藤淳著作集』(全5巻)ほか多数。

ワシントン風^{かぜ}の便り

昭和五十六年四月十日 第一刷発行
昭和五十六年六月五日 第二刷発行

定価 一一〇〇円

著者 江藤 淳

© Jun Eto 1981, Printed in Japan.



発行者 加藤勝久

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二丁目三十三 郵便番号二三
電話 東京三—九三—二三(大代表) 振替東京八一三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

落丁本・乱丁本は、ご面倒ですが小社書籍製作部宛にお送
りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。

目次

I

ウッドロー・ウイルソン・センター

11

翔んでる犬

16

日本の車・アメリカのよさ

22

雪のカクテル・パーティ

28

大使館の半月弁当

34

ワシントンの春

39

着かない飛行機、遅れる列車

45

シンシナチの高校生たち

51

ワシントンのテレビ局

57

中古車と犬と研究発表会

63

*

郵便と本と雑誌

69

ヤマネとチワワ

立原正秋さんのこと

新しい文学の胎動

若い新派

列車のなかの会話

Ⅱ

選挙のあとさき

塩と胡椒

偉大と凡庸

八〇年代の日本と世界

同盟国との付き合い方

米ソ関係の逆転

136 130 124 119 113 107

99 93 87 81 75

自衛権と交戦権

142

オリンピックという踏み絵

148

ワシントンの明暗

153

人質救出作戦失敗

159

*

憲法第二十条の仕掛け

165

レーガン大勝の背景

171

革新派の改憲論

177

Ⅲ

検閲と鎮魂

185

時差のある国

190

『ミスター・リンカーン』

195

獅子のような三月

日米文化教育会議

大平首相、逝く

最後のワシントン便り

*

占領学会、こぼれ話

オエディポスの帰国

今昔の感

宮前平の親殺し

山の見えない都会

あとがき

252

246

240

234

229

223

218

213

207

201

装帧／熊谷博人

ワシントン
風かぜの便り

どういふものか、雪の降るまえには、わが家のコッカー・スパニエル犬バティが、ちょうど赤ちゃんが、おつむテンテンをやる時のように、前足で頭をこすりはじめます。朝、目が覚めたときにやるのですが、そのときどんなに晴れあがっていても、バティが頭をこすりはじめた日には必ず雨が雪になるので、ブーツをはいて行ったり、フードのついた防寒着を着て行ったりするようになりました。

逆に、いくら曇っていても降りそうな空模様でも、バティが、おつむテンテンをやらない日は、まず例外なくあとで晴れてしまう。いったいどこでどんな工合にお天気の変化を察知し、頭をこすって見せるのかよくわかりませんが、どうもわが家の予報官どのの予報は、過去五ヵ月の経験律に照らして、よくあたるアメリカの天気予報と較べてもあまり遜色がないようなので、昨今いささか驚いているところなのです。

三月一日の土曜日なども、まったくそうでした。この日は朝のうちは、気温は低いけれどもよく晴れあがっていて、一見雪の気配などどこにもありませんでしたが、ベッドから出ようとしてバティはと見ると、左の前足でしきりに、おつむテンテンをやっている。はてな、おかしいな、これでも雪になるのかな、と思っていたら、お昼まえ頃までにはすっかり空に雪雲が拡がり、白いものが降りはじめたのでびっくりしました。

ウッドロー・ウイルソン・センター

ウッドロー・ウイルソン・センターといっても、日本ではまだあまり名を知られているとは思えません。米国ワシントンD・C・のまん中にあるユニークな研究所です。

読んで字のごとく、これは第二十八代の合衆国大統領ウッドロー・ウイルソンを記念する研究所で、レジデンシャル・メモリアルとして運営されることになっている。ジェファソン・メモリアルとか、リンカーン・メモリアルとか、大統領を記念するのがレジデンシャル・メモリアルで、大体は建造物である場合が多いようですが、ウッドロー・ウイルソンは学界から政治の世界に入った人で、元来がプリンストン大学の総長だった人ですから、研究所を創立して治績を記念するのが最もふさわしいだろうということに衆議一決して、このセンターが設立された。

所在地は首都ワシントンの中心部、しかも天皇陛下御訪米の折にリターン・バンケットにおつかいになったスミソニアン・インスティテューションのなかにあります。常勤の職員は所長と副所長、それに少数精鋭の事務スタッフだけで、研究員はすべて長くて一年、短くて三ヵ月というよう

に、一定期間招かれてやって来る。大学からだけではなく、外交界の長老なども招かれるようで、昨年春に私が立ち寄ったときには、元北京駐在大使の小川平四郎氏が来ておられました。

ほかの世界ならなおさらのことですが、大学にいてさえ雑用が多くてなかなか研究に集中できないというのは、世界各国共通の悩みです。そこで、しばらく職場を離れて俗事にわずらわされず、朝な夕な研究三昧の生活を送れるようにしたらどうだろうという、万国の研究者たちの夢が形をなしたのが、このウッドロー・ウイルソン・センターだといってもいいでしょう。このセンターに来る気はないかという招きを最初に受けたのは、今から三年ほど前のことでした。

ははア、これはジムの好意だな、と私はすぐに気がつきました。ジム、つまり所長のジェイムズ・ピリングトン博士は、十七年前に私がプリンストンで知り合った旧知の友人です。当時はまだ若手の準教授で、アパート住いをしていましたが、大学の夫人連中の集まりで家内がピリングトン夫人と知り合ったのがきっかけとなり、招いたり招かれたりするような仲になりました。

ジムはプリンストンの出身で、ローズ・スカラーに選抜されてオックスフォードで学び、学位もオックスフォードで取ったというロシア史の俊秀です。とはいっても、アメリカの学者には珍しく野球が好きだという庶民的な一面もあり、私どもは西も東もわからないころにずいぶん世話になりました。その後、ジムはプリンストンで順当に昇進して教授になり、ソ連国内ですら一目置かれるようなロシア史学界の大立者になりましたが、ウッドロー・ウイルソン・センターが設立されたとき要請されて、その所長に就任したのです。

そのジムが声を掛けてくれたのですから、一も二もなく出掛けたかったのですが、困ったことに当時は老父が弱っていて、いつ何時容態が悪くなるかわからない状態でした。それに加えて、勤務先の大学も人手が足りないもので、長期出張して同僚に迷惑を掛ける結果になるのも気がかりでした。そんな事情で、私は、「残念ながら今は行けません。そのうちにきつと」と答えたいわけにはいかなかったのです。

それから三年、センター当局もジムも、ずいぶん根気よく待っていてくれたものです。めぐり合わせというのは不思議なもので、そのうちにもう一人の親しい友人が、センターのスタッフに加わりました。それはついこのあいだまで副所長をしていたジョージ・バックカード博士です。

ジョージは多彩な経歴の持主で、やはりプリンストン出身ですが、フォード財団の研究生として日本に来ていたときに知り合いました。そののちライシャワー大使の補佐官を勤めたり、「フィラデルフィア・プレティン」の主筆をやったりして、共和党から上院議員に立候補し、惜敗したところへジムが声を掛け、ウッドロー・ウイルソン・センターの副所長になったというのが、あらましのいきさつのようにでした。

友達が一人いるだけでも身近に感じられるのに、二人もそろっているということになると、これはもう行かないいうちから我が家のようなものです。昨年の春ヴァージニア大学に連続講演に行ったときに立ち寄った際にも、旧知の場所に戻って来たように感じたものでした。

そののち、私の身の周りの事情が変わりました。老父が他界し、墓所の修理も済み、一年祭もどここ

おりなくとりおこなうことができたからです。大学の人手不足は相変わらずですが、先輩も同僚も寛容に長期出張を認めてくれました。ジムもジョージも、律義に三年前の約束を覚えていてくれて、招待を復活させてくれたので、喪が明けてみたらさあワシントン行きだ、という雰囲気になって来ました。

数えてみると、もう以前帰国したときから満十五年経っています。大正時代が過ぎ去ったようなもので、明治の終わり頃に日本に帰って来た留学生が、昭和の初めに再び外国暮らしをするのと同じようなものだと考えることもできます。こちらもそれだけ年を取ったわけで、十七年前に留学したときに二十代の終わりだった私はすでに四十代の半ばを過ぎ、髪の毛も薄くなって、だいぶ白髪もふえました。

変わったのは、もちろん私だけではありません。日本も変われば、アメリカも変わりました。つまり日米関係は、十五年前には想像もつかないようなかたちに大きく変化してしまったのです。

このことを一番よく象徴しているのは、お金の出所でしよう。十七年前に留学したときには、私はロックフェラー財団の연구원という身分で、最初の一年は財団から給費を受けて暮らしていたのです。ところが今度は、私は国際交流基金の派遣연구원という資格で、ウイルソン・センターに行くことになりました。私への手当、旅費、研究費等々は、国際交流基金とウイルソン・センターが、折半というよりは六分四分ぐらいの割合で、共同で出してくれるという約束だからです。

フルブライト基金にしても、たしか去年からか今年からか、資金が日米共同の資金になりました。